

パフォーマンス漢方

耳鼻咽喉科診療で役立つ 漢方と処方のコツ



五島史行（東海大学医学部附属病院耳鼻咽喉科准教授）

本コンテンツはハイブリッド版です。PDFだけでなくスマホ等でも読みやすいHTML版も併せてご利用いただけます。

▶HTML版のご利用に当たっては、PDFデータダウンロード後に弊社よりメールにてお知らせするシリアルナンバーが必要です。

▶シリアルナンバー付きのメールはご購入から3営業日以内にお送り致します。

▶弊社サイトでの無料会員登録後、シリアルナンバーを入力することでHTML版をご利用いただけます。登録手続きの詳細は<https://www.jmedj.co.jp/page/resistration01/>をご参照ください。

▶登録手続

1. パフォーマンス漢方とは? p2
2. パフォーマンスを誤ると p2
3. 治療効果を上げるには p3
4. 話の聴き方とグッドパフォーマンス p4
5. 漢方のとどめの一言 p7
 - 1「苦勞人に効く漢方」補中益氣湯
 - 2「美人に効く漢方」当歸芍薬散
 - 3「あなたのような方に最適な漢方」加味帰脾湯，柴胡加竜骨牡蠣湯
 - 4「心配性に16番（半夏厚朴湯）」
 - 5「よい子に効く漢方」小建中湯
6. 漢方薬が効く症状 p11
 - 1 めまい
 - 2 乗り物酔い
 - 3 頭痛
 - 4 習慣性扁桃炎
7. 漢方薬の副作用 p17
8. まとめ p18

▶HTML版を読む

日本医事新報社では、Webオリジナルコンテンツを制作・販売しています。

▶Webコンテンツ一覧

1. パフォーマンス漢方とは？

日常診療で従来の治療に限界を感じることは多い。その際に漢方薬は重要な武器となる。どのような症状に、どの漢方を使うのかという薬剤選択法から漢方の世界に入ることが多い。また、治療効果を上げるために薬剤選択にこだわることも重要である。

不思議なことに漢方を好きな先生が漢方を処方すると治療成績もよく、「やっぱり漢方ってよく効くな！」となり、逆に漢方を嫌いな先生が漢方を処方すると治療成績が悪く、「やはり漢方は効かない」となる。そして漢方好きの先生はますます漢方が好きになり、漢方嫌いな先生はますます漢方が嫌いになるという悪循環に入る。「好きこそものの上手なれ」と言うことわざの通りである。

これらからわかる治療効果に影響する重要な要素は、薬剤選択以外に誰がどのように処方するかがある。「やり方」(方法)と「在り方」(心の状態)である。このように薬剤選択以外で治療効果に影響する部分を「パフォーマンス」と言い、漢方薬におけるこのテクニックを「パフォーマンス漢方」として概説したい。

2. パフォーマンスを誤ると

日常診療でパフォーマンスを誤ると患者からの投書につながる。たとえば、他疾患で耳鼻咽喉科入院中の患者がめまいを起し、診察の結果、良性発作性頭位めまい症であったため、「良性発作性頭位めまい症ですね。たいしたことはありません」という説明をした場合、本人から以下のような投書を受け取った。

入院中に生じためまい症状について「何が原因なのか？ どうすればよいのか？」という質問に対して「めまいは石が動くから」との説明があったものの、「その石がどうしてできるのか？ 何が原因なのか？」と家人

が尋ねたところ「だから石が原因だと言いましたよね！」と強い口調でた
たみかけるように言われました。腑に落ちない家人が「石のできた原因
を教えてください」と質問すると、素っ気なく「それはわかりません！」と
の答えでした。病気の心配に対して非常に素っ気ない対応をされ非常に
納得がいきません。病人として医師にはもう少し納得のいく説明をして
もらいたいと思い投書させて頂きました。

上記の投書では担当医は良性発作性頭位めまい症と診断を告げ、原因が
石(耳石)であることを説明しており、医学的には間違ったことは伝えてい
ない。その伝え方に問題があったか、投書に至るまでの医師と患者の關係
に何か問題があった可能性が考えられる。このようなことにならないため
にも診療のパフォーマンスに気をつける必要がある。

3. 治療効果を上げるには

「6カ月以上続く難治性のよくわからないめまいにはどの漢方がよいです
か？」など難しい症状に対する漢方薬の適切な選択について質問されることが
多い。しかし、実際には「この症状にはこの漢方」のような情報がちまたにあ
ふれている。以下のような症例を経験すると、薬剤選択よりも、どのように
して処方された薬剤かが治療予後に影響するのではないかと考えられる。

<症例>

60歳、女性のメニエール病患者に^{れいけいじゅつかんとう}苓桂朮甘湯を処方し、数週間経過を
見ていたが改善なく、某大学病院の受診を希望された。大学教授宛ての
紹介状を書いた。後日その患者が再来し、「おかげさまですっかりよくな
りました。先生の処方された苓桂朮甘湯は効きませんでした。すごく
効果のある薬を出してくれました」と言われた。私が「よかったですね！
ところでその薬は何でしたか？」と聞いたところ「39番と書いてありま

した」との回答であった。

苓桂朮甘湯と39番は同じ漢方薬である。このように同じ方剤であっても私が処方する場合と大学病院で教授が処方する場合では治療効果が異なることがわかる。これはプラシーボ効果によるものと思われる。

<プラシーボ効果>

プラシーボ効果とは薬理作用のない薬が効果を示すことである。多くの病気は身体的な要因と心理的な要因とが絡み合って症状を形成している。有効な薬剤がない時代には名医はこのプラシーボ効果を有効に使っていた。

プラシーボ効果の機序としては①暗示、②条件付け、③自然治癒力、信頼関係、によって効果が高まることが知られている。漢方薬はプラシーボではないがこの効果を最大に高めるためのパフォーマンスを紹介する。

4. 話の聴き方とグッドパフォーマンス

医師は患者の話聴くことが重要であると承知していても、患者の長い話が始まりそうになると恐怖を感じ、イライラする。これは話がいつ終わるのかわからないという恐怖感から来るようである。

スキーをされている先生方は周知のようにスキーではまず安全のために止まり方をしっかり教わることから始まる(図1)。

傾聴のテクニックとして重要なものに反応(そう)、興味(なるほど)、理解(たしかに)がある。覚えやすいようにこの頭文字を取って「そなた」テクニックと言っている。



図1 スキーではまずは止まり方から学ぶ
「傾聴神話」からの解放

傾聴をしようとするために、いかに話を聴くかというスキルを磨こうと
してしまふ。しかし、患者の長い話を聴いている最中にイライラしないた
めには話の聴き方を工夫するのではなく、話の止め方を熟知するとよい。
話をいつでも止めることができると思っていれば患者と接する時に余裕が
もてる。

話を止める技術としては患者の長い話が始まりそうになったら、相手の
息継ぎする瞬間にその語尾にかぶせるように「なるほど」と相づちを打ち、
承認の言葉(たとえば「それは大変でしたね!」)を述べた後で、医師が質問
したい内容に踏み込むとよい(図2)。

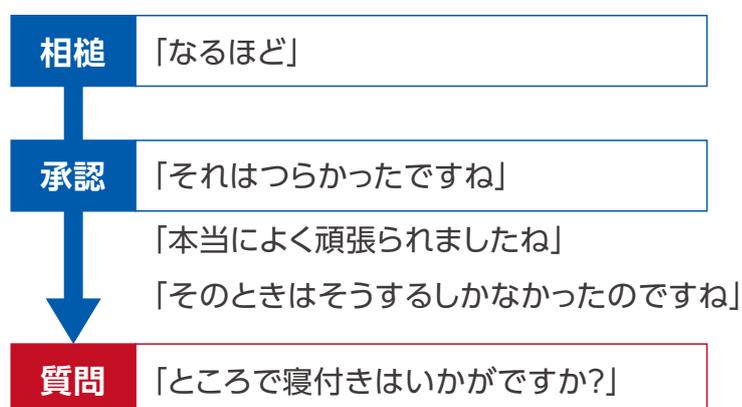


図2 話を止める技術

長い話が始まりそうになったら、相手の息継ぎする瞬間にその語尾に
かぶせるように相槌を打ち、引き続いて承認の台詞を言う。相槌の際
には相手の息継ぎに集中することが重要。承認の台詞は複数を使い分
ける。

ここでのポイントは会話の内容ではなく、息継ぎに意識を集中させるこ
とである。長い話の場合には決して会話の内容をよく理解しようとか、質
問をしてはならない。あくまでも話を聴いているというパフォーマンスを
演じることが重要である。一度で話を止めることができず、会話の主導権
を取り戻せない時には何度も介入を繰り返すことでいつかは止めることが
できる。

診療に当たる医師の心の在り方は非常に重要である。心の在り方は患者
に容易に伝わるためである。たとえば内心、「この患者、面倒くさいんだ